

尾道市立大学芸術文化学部日本文学科・尾道市立大学日本文学会共催

## 第十七回 おのみち文学三昧

～二〇二五年度 おのみち文学三昧プログラム～

### ●開会の辞

灰谷 謙二 尾道市立大学日本文学会会長

### ●第一部 尾道市立大学日本文学会大会（研究発表）

#### ① 島袋 涼氏

沖縄方言における疑問の文末詞「バ」の意味と用法について

#### ② 上田 萌生氏

三条西実隆独吟『文明十九年六月二十五日 北野社御法楽 賦唐  
何連歌百韻』について

#### ③ 金光 七穂氏

『太平百物語』における幽霊の特徴  
― 『伽婢子』との比較を中心に―

#### ④ 宮元 望氏

夢野久作「死後の恋」論  
― 〈私〉と〈あなた〉が構築する独白の構造―

#### ⑤ 島田 喜行氏

自己を見つめるということ  
― 道徳教育行き・フツサークル現象学経由―

### ●第二部 公開講演会

講談師 旭堂 南海氏

講談 「神崎与五郎の東下り」

### ●閉会の辞



アンケートに  
ご協力ください

## 沖縄方言における疑問の文末詞「バ」の意味と用法について

島袋 涼

本研究は、沖縄県で使用される疑問の文末詞「バ」の意味と用法を明らかにすることを目的とする。「バ」は動詞・形容詞・名詞など多様な語に付される文末詞であるが、発表者の内省では、疑問文であれば無制限に使用できるわけではなく、その自然さは文脈や状況に左右される。本研究では、SNS アンケートおよび沖縄県出身者への聞き取り調査を実施し、「バ」の認知度・使用度、さらに具体的な使用場面と機能を調べた。アンケートの結果、回答者の9割以上が「バ」を聞いた経験を持ち、半数以上が日常的に使用していた。また聞き取り調査から、「バ」は疑問詞疑問や事実確認疑問などでは自然に用いられる一方、選択疑問・同意要求疑問・依頼／勧誘疑問では使用が限定されることが明らかになった。特に話し手自身が行動に関与する場合の選択疑問や初回の依頼／勧誘では不自然とされ、「驚き」「不満」「期待とのずれ」などの感情が伴う場面で使用されやすい傾向が確認された。以上より、「バ」は全ての疑問文に用いることができる文末詞ではなく、質問者の関与の有無や感情表出と密接に関わる文末詞であることが明らかになった。

## 三条西実隆独吟『文明十九年六月二十五日 北野社御法楽 賦唐何連歌百韻』について

上田 萌生

本発表では、室町時代後期の公卿・三条西実隆による独吟連歌作品『文明十九年六月二十五日 北野社御法楽 賦唐何連歌百韻』を取り上げ、その翻刻と分析を通じて、実隆の連歌活動の一端を明らかにすることを目的とする。三条西実隆は、一万首以上の詠草を残した歌人であると同時に、『源氏物語』や『伊勢物語』の研究をはじめとする古典学者でもあった。さらに、連歌師としての側面も持ち合わせているが、彼の連歌作品に関する個別研究は少ない。そのため、本発表では作品そのものに焦点を当てたい。

当該連歌と同様の端作を持つ百韻連歌は、後土御門天皇の作品と甘露寺親長の作品の二つが現存する。連歌において重要視される発句、発句から三句目までの「三つ物」、そして全体の流れである「行様」を、この二作品と比較しながら、実隆の連歌表現の特徴を考察する。また、北野社にゆかりのある句や、実隆自身を詠んだとみられる句にも注目し、作品の背景と作者の意識を探る。

## 『太平百物語』における幽霊の特徴

— 『伽婢子』との比較を中心に —

金光 七穂

夜に人々が交代で怪談を語り百本の蠟燭を一話ごと消していく百物語怪談会は、最後の蠟燭を消した時に何かが現れるとされていた。この百物語怪談会をモチーフとした百物語は近世で多くの作品が生まれ出され、様々な怪異が登場するが、本発表では特に幽霊に注目した。

百物語作品の中で足のない幽霊が登場するのは『太平百物語』が始めであり、他の百物語では幽霊の足の有無に関する記述が全くないものや、挿絵では幽霊の足が明確に描かれているものもあった。そこで、本発表では『太平百物語』に収録される「十作ゆうれひに頼まれし事」と「三郎兵衛が先妻ゆうれいとなり来たりし事」の二話に注目し、『太平百物語』の幽霊の特徴について考察する。

本発表を通して『太平百物語』の幽霊話は『剪燈新話』や『伽婢子』から一途な愛情を持つ幽霊話の特徴を受け継いでおり、また『太平百物語』の足のない幽霊は百物語以外から影響を受けていることなどを明らかにする。

## 夢野久作「死後の恋」論

— 〈私〉と〈あなた〉が構築する独白の構造 —

宮元 望

夢野久作「死後の恋」は、一九二八年一〇月に博文館より発行の『新青年』第九卷第一二号に発表された。

本発表では、独白の語り手と受け手に焦点を当てて考察する。まず、作中の言及や校異から、語り手であるコルニコフは自らの語りの信用性を高めようと努める〈私〉として設定されていることを明らかにした。次に、先行研究やロシア皇女アナスタシヤの生存伝説を踏まえつつ、作中にみられる「現実」と「幻想」の要素を分析した。これらの境界はコルニコフの幾度も物語る行為によって曖昧になり、独白の受け手である〈あなた〉の最終的な判断決定にも作用している。〈あなた〉はコルニコフの呼びかけによってしか存在を示すことができないが、自由に判断決定できる一つのキャラクターとして位置づけられる。語り手と受け手、両者の存在があることで語りは構築され、この構造によって「死後の恋」の物語は支えられているといえる。以上のことから、本作における一人称独白体の意義を見出している。

自己を見つめるということ

―道徳教育行き・フッサル現象学経由―

島田 喜行

本発表の目的は、なぜ自己を見つめることが道徳性の育成において重視されるのかという問いに対して、フッサル現象学の知見をもとに一つの答えを与えることである。

小・中学校では道徳科を要として、高等学校では公民科を中心に、学校での教育活動全体を通じて行われる道徳教育の目標は、「よりよく生きるための基盤となる道徳性を養う」ことである。この道徳性の育成を目指す学びでは、「自己を見つめる」ことが重視されている。しかし、なぜこれが重視されるのか。

本発表では、次のような仕方では、この問いに答える。フッサルが切り拓いた「意識の志向的相関関係」を援用すれば、「自己を見つめる」ことには、私の生き方を模索するための内省だけでなく、世界や他者への私の関わり方を問い直す吟味という役割もあることを明示できる。そして、この二つの役割の自覚が人間としてのよりよい在り方と振る舞い方を追求しようとする道徳的な探究へと私たちを駆り立てる力になるからだ、と。